

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'84 秋

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11

婦選会館内

T151

振替 東京九一 一九一八九一

発行 一九八四年九月二九日

風雲急!

今がんばらなければ!!

各地で共修へ向けての運動が高まるなかで
文部省の態度は確かに少し変わって来ました。
七月二十五日の文教委員会での答弁(3ペー
ジ)、検討会議に和田典子世話人が呼ばれる
など(2ページ)、いくらか共修に向けて積

一〇・二七集会を開きます!

日時 一〇月二七日(土)

午後一時半～四時半

場所 婦選会館(電話三七〇一〇二三八)

男たちも訴える

実現させよう、家庭科男女共修!

男性にとっても共修が必要であることを確
認するとともに、最近の激しい動きについて
情報を交換し、運動のすすめ方について話し

極的になったようにも見えます。

その一方で、高校PTAの決議(15ページ)
など、逆向きの声も強まって来ています。

検討会議の結論は今年中に出ると言われて
います。もう一息! 今がんばらなければ!!

報告者・「家事担当者」を経験した立場から

元中学校長 荒木 敦さん

◆父親の立場から

育児連盟 丹原恒則さん

◆共修を経験した男子生徒

合いましょう。

(署名運動は引き続いて行っています。用紙
が必要な方は事務局に郵便でご請求ください)

もくじ

九月三日家庭科教育に関する検討会議 に出席して.....	(2)
七月二十五日文教委員会議録抜粋.....	(3)
臨教審スタート.....	(3)
二つの要望書.....	(4)
高校長協会家庭部会の動き.....	(5)
家庭科共修、マスコミの中では.....	(5)
各地の動き.....	(7)
東京・長岡・長野・愛知・鳥取 京都・大阪・佐世保.....	(13)
いろいろな集会から.....	(13)
家教連・性教協・Weの会・学生の会 驚いた高校PTAの決議文.....	(15)
連絡会報告.....	(15)
世話人会報告.....	(16)
新世話人.....	(16)
家庭科の内容検討結果.....	(17)
どっちが先? 共修の制度と内容.....	(17)
中学校での共修こそ重要.....	(18)
「差別撤廃条約への異議」批判.....	(19)
「家庭一般」は選択必修になると いうけれど.....	(20)

九月三日

家庭科教育に関する 検討会議に出席して

和田 典子

さる八月一〇日、文部省高石初中局長名で、「家庭科教育をめぐる諸問題について、貴殿のご意見をうかがいたい」という依頼が届きました。このことについては四八婦人団体を通して既に下交渉を受けていましたので、予期していたことでしたが、当初は「会の代表としてではなく、あくまでも個人として」というのがその条件でした。

ところが、下旬になると職業教育課の担当官から連絡があり①肩書きは「家庭科の男女共修をすすめる会世話人」でよいこと。②資料——「家庭科、男子にも!!」のほかパンフレット五種——は委員一六名分のほか文部省関係者一五名分も提出してもらいたい。③オブザーバー一名の参加を認める。④発言のレジュメがあれば配布する。ということになり急いで準備をととのえ当日をむかえました。

九月三日、午後一時半から、まず佐田疆氏（前高校長協会、家庭部会長）が意見を述べ

たあと、オブザーバーの半田たつ子さんともに入場し、きめられた席につきました。意見四〇分、質問三〇分ということで、直ちに発言に入りました。

△意見発表のあらまし▽

はじめに、配布した資料のそれぞれについて、発行年、内容を紹介したあと、当日は、持参した「男女共修家庭科の授業実録——家教連編、たのしくわかる家庭科の授業シリーズ」六冊を、教育内容の参考資料として回覧してもらい、以下の意見を申しのべました。結論的にいえば、高校家庭一般は、一般普通教科として、男女共修（共学・必修）にすべきである。その理由

1. 女子必修「家庭一般」の矛盾を解明したいということから三〇年にわたって家庭科の実践・研究をつづけてきた結果、家庭科の本質は「生命と生活の再生産にかかわる文化価値を継承、発展させるものである」との結論に到達した。こうした教養は、男女をとるものではない。

2. 生徒の生活や意識の現状をふまえるとき、衣食住や生活リズム、問題行動の根底にある生活規律の回復、将来をみ通した進路観を確立させるためにも、家庭や職業に関する学習が欠かせない。

3. 家族・家庭生活の崩れ、家庭の教育力の低下という現実からいって、親自身も昏迷している家族・家庭のあり方や、衣食住・子育てについての文化を教えて、家庭教育を補強することが、国民の各層から求められている。

4. 家庭建設や親になるための基礎的教育は、青年たちの学習要求でもあり、年令相応の社会的成熟を促す機会になる。

5. 男女共修家庭科の実践は、既に一〇年にわたって各地で続けられているが、例外なく成果をあげ、独自の教育効果を実証している（ここでは数多くの事例を示しました）。

6. 共修は「家庭や子どもへの養育に対する男女の共同責任の自覚」「性役割分担についての定型化された概念の撤廃」などの「条約」の理念にそう、最も有効な教育措置である。

△質疑▽

- (1) 女子のみの母性教育は不要か。
- (2) 男子高校でも必修させるのか。
- (3) 必修単位数が2では不足ではないか、4単位の場合、どの単位をあてるのか。
- (4) 家庭科を生活科と改称するのはどうか。
- (5) 社会科の現代社会でやれないか。
- (6) 中学校技・家科のあり方について。
- (7) 教育内容の精選は考えていないか。

七月二十五日

衆議院

文教委員会議録抜粋

江田委員……………文教委員江田五月さん
高石政府委員……………文部省初等中等教育局
長高石邦男さん

江田委員……………今の日本社会の抱えているいろいろな課題ということもありますから、家庭科というものの内容をさらに充実させ、しかも、それを男子にも教えて行くという方向をぜひとるべきであって、検討会議に任しているんだから知ったことじゃないというの

文部省の津止教科調査官は、9月6日取材の記者に対して次のように言ったとのことです。

「普通教育としての家庭科は中学まで、高校は職業教育。だから、調理師にでもなりたいたい男の子が選択すればいいので、将来とも男女必修になることはあり得ない」
(半田)

じゃなくて、やはりちゃんと方向性は与えていく、こういう方向で議論してほしいということにならないといけないと思うのですね。

家庭科の問題をいろいろ議論していますと、女子の家庭科も選択にすることになっては大変だということで、女子の家庭科は絶対に必修で守ってくれという声が強いわけですが、これは私は当然だと思ふのですね。女子必修。男子もやはり必修。

男女とも選択にしようということになる可能性はあるのですか、ないのですか。

高石政府委員……………今のところその点については全く白紙でございますが、基本的にはそういう内容について強化していかなければならないという態度でございます。

江田委員……………この検討会議では中学校の問題はどうしますか。

高石政府委員……………高等学校の家庭一般をメインのテーマにしておりますが、附随的に中学校の技術・家庭科についても当然論議が及んでくるであろうと思います。

江田委員……………附随的というのは、この検討のテーマにはちゃんと入るということでしょうか。

高石政府委員……………条約の関係でその問題についての指摘も若干なされておりますので、検討はしていかなければならないと思っております。

臨教審スタート

半田たつ子

「戦後政治の総決算」の一環として「戦後教育の見直し」をうたい文句に掲げる臨時教育審議会の委員二十五人が決まりました。中曽根首相は、森文相を担当に指名するとともに「政府全体で取り組むよう」指示。臨教審は8月21日正式発足、9月5日に初会合が行われました。

発表された二十五人の委員のうち、女性三人。先の文教懇の委員で、報告書の個別意見に「教師労働者論」を強く批判した曾野綾子氏が、首相の指示でメンバーに加えられています。各界から人材を集めたのでしようが、委員就任を「男子の本懐」と答えた人もあり全体に古めかしい印象です。朝日新聞のイン

タビユーに木村治美氏が「家庭科問題は重要発言していきたい」と答えていたのが印象的でした。

何しろ首相は、所轄の文部大臣(省)より先に次々と教育改革構想を打ち出し、中央教育審議会というこれまでの文教政策立案・策定機関を差し置き、新しく首相直属の諮問機関を作ったのだから、たいした意気込みです。首相が臨教審の初会合で諮問する内容は、①学校教育制度の再検討②学校だけでなく家庭社会を含む諸機能全般の活性化③学歴社会の是正、の三つを柱にしつつ、包括的なものになる見通しとか。初会合後審議項目と審議の優先順位について論議、四つか五つの小委員会を設置し、専門委員を任命して具体的な各論の論議に入る段取りです。

国民の切実な訴えや提案を受けとめ、子供の現実を知るためには、公聴会を開いたり、授業を見るだけでなく、委員自らもやってみてはどうか。審議の中身ができるだけ明らかにし、各委員の私見も積極的に語ってもらいたい。委員には正直言つて落胆したけれど、差別・選別・抑圧教育を隠蔽し拡大するような教育改善を阻止するためにも、私たちの側の教育改革、家庭科の男女共修を、委員に訴え続け、実らせたものです。

二つの要望書

梶谷典子

◇臨教審会長に対して

臨教審がスタートしましたので、さっそく岡本道雄会長あてに要望書を送りました。要望事項は次の三点です。

1. 生活についての教育を重視し、学校教育の中にはつきり位置づけること。
2. 男女平等をすすめるための教育を重要視すること。
3. 中学校、高等学校で家庭科の男女共修を
実現すること。

臨教審では、「社会の変化に対応する教育」「国際化」ということを特に考えるそうですから、そのことに関連して理由を書き添えました。これからの社会で一人一人の生活が激しく変わり得ることを考えると、生活的に自立できる力を身につけることは極めて重要です。男女平等をすすめることもまた重要です。わが国は国際的にみて、男女平等に関して非常に遅れていますから、男女平等をすすめるための教育は特に積極的にする必要があります。

ばなりません。そのためには家庭科の男女共修が極めて有効であることを強調しました。

◆婦人問題企画推進本部長と婦人問題担当室長に対して

長に対して

婦人問題企画推進の総責任者である中曽根康弘本部長と、その事務局担当の松本康子婦人問題担当室長に対しては、差別撤廃条約の精神にそって中学校「技術・家庭」、高等学校「家庭一般」の男女共修の早期実現を強く要望しました。

理由として書いたことは――

◆「技術・家庭」の学習領域の男女別指定も「同一の教育課程」（第10条(b)）に反する。

◆条約は「男女の伝統的役割の変更」(前文)と「男女の役割についての定型化された概念の撤廃」(第10条(c))を求めているので、男女いっしょに家庭生活について十分学習させることが必要。

◆条約では「すべての適当な措置」ということばがくり返し使われ、「遅滞なく」差別撤廃のための政策を行う（第2条）よう要求している。その精神にそうために共修の早期実現が必要。

◆現在の生徒の状況——生活能力の低さ、生活の荒廃、非行の増大——や家庭の状況——父親不在——も考慮すること。

高校長協会

家庭部会の動き

芦谷
薰

東京都高等学校家庭科教育研究会59年度総会にて、高校長協会家庭部会の事務局長桜井氏は、先頃報道されたN C 9の家庭科問題のあつかい方に触れながら「男女共修に反対している旗頭と思われるが、反対をしているのではない、今すぐにやれないから無理だ」といっている」との立場を強調。無理な理由として次の三点をあげた。①中学での共修が完全でない（文部省には中学の技術・家庭こそ問題にすべきと要望している）②教師不足③指導要領の「実験実習は5/10を当てよ」△これを明記させたのは家庭部会▽があるが今でも施設設備が充足されていない中、マイナスシーリングの御時勢柄、解決の見通しが無い。

さらに今の情勢、今後をどのように考えているかについて、「外務省は形式的平等等でありとしているから、男子も必修にできないなら、選択になってしまふ。しかし選択は何としても防ぎたい。女子必修がはずされることとが心配だ。女子必修がはずされると、一番

困るのは、家庭の機能が崩壊している日本の社会だ。文部省は外務省におされてダメだ。

文教委員、家庭科教育検討会議員へ働きかけている。将来構想については、①将来は男子にも学ばせる意義はある②国民のコンセンサスを得てからでなければならぬ③男女に応じた内容でなければならない」

将来構想については58年家庭部会総会で報告されたが、兵庫県の校長から「条約と相反する面があるのではないかと懸念する」という批判も出されたようだ。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

さて家庭部会では、昨年10月に①人間教育、母性教育としての家庭科の充実振興せよ。②「家庭一般」の現行履習形態は我國の実情に
応じた教育的配慮で高く評価できるものである。
よって今後も堅持するようにという趣旨
の要望書を文部省に出した。「校長さん達の
意見がまとまったから要望書を出す予定」と
いう話も出ている。これは家庭部会だけでな
く全国高校長協会全体の意見として出すとい
うことであろう。

☆
☆
☆
☆
☆

文部省初中等教育局職業課長阿部氏は、家庭部会58年度総会にて次のように発言している。「最終的な条約の解釈権の所在は外務

家庭科共修、

マスコミの中では

―検討委員会が発足してから―

中嶋 里美

六月十六日に開かれた「共修へもう一息」にはNHKの「ニュースセンター九時」が取材にきて、会の様子や和田典子さんへのインタビューも行なわれた。これは六月十八日に初会合を持った「家庭科教育に関する検討会」

議」の様子、及び赤羽商業、第二商業の共修の授業風景と共に報道された。しかしこの報道の仕方は、番組の編集の方針や、レポーターの発言の中に、家庭科共修に対する認識に欠ける部分があり、取材に協力してきた側からも、家庭科共修を望む側からも抗議が出された。とりわけ共修をうけている男子生徒の意見の紹介では共修に肯定的な意見を一つしか出さず（実際にはもっと多くあった）、赤羽商業取材の際の男子の否定的意見は全部だしていた。さらにレポーターのしめくりも、性別役割分業をどう変えるのかという視点を全く欠くものであった。

六月二〇日朝日新聞「論壇」に原正敏氏（静岡大学）が日本では中学、高校での男女共修が行なわれれば家庭科は十四時間になり、これでは多すぎるのでこちらを削減して、技術職業教育を男女平等に保障すべきではないかと投稿。それに対しては七月二〇日高月佳子（都立農産高、家庭科）氏が同欄で反論した。日本では役割分業意識が強く、かつ又諸外国と比べて極端に男性の家事時間が少ないことが働く女性に過重負担をしいており、労働権を侵害している。またますます進む家庭崩壊の現状も、原氏のいうように家庭科を削減したらさらに悪くなるだろう。家庭科を共に学ぶことによってよりよい人間関係を育てていくことが出来ると主張している。

各地の動き

新東京都行動計画 実施細目説明会

梶谷 典子

「婦人問題解決のための新東京都行動計画」昭和59年度実施細目説明会——は、この6月にでき上ったピカピカの東京都婦人情報センター（飯田橋駅のそば）で8月14日に開かれました。

家庭科男女共修については相変わらず「学習内容、方法の検討」という方針が書かれています。中学、高校それぞれについて「開発指導資料集」を出して「研究結果を示した」と言っています。「都としては、男女別に学習するように指導するつもりか」と質問したところ、「東京都公立高等学校教育開発指導資料集に男女いっしょに学習する場合の具体的な方法について書いてある」という答（教育庁指導部長）でした。「いっしょでいいということですね」と念を押すと「はい」とうなずいていました。

東京新聞七月一日の「社説」でも「男が家事を学ぶこと」という見出しで多くの紙面を使っている。衆議員文教委員会での森喜朗文部大臣と江田五月氏のやりとりで始まるこの社説では江田五月氏の「男子に家事が必要」の例も取上げている。さらに技術革新による家事の機械化、物価や金融の仕組みを知ること、消費者の立場から環境や資源を考えることの重要性をあげ家庭科に全人的な生活教育が期待されることを述べている。こうした重要な共修の運動に何故、男性の参加が少ないのか。「この世に、男だけ、女だけのソングや不幸はないはずなのに」と男性への参加をよびかけている。

さらに朝日新聞の「ひととき」欄や「声」欄等にも「共修が必要」の意見が多く出され、その量は昭和四八年の改訂の時、女子高校生から出された意見に匹敵する。

三人の息子を持つ新潟の桑原さんは息子達が大学生になり下宿生活をする中で十分家事を仕込まなかったことを反省しつつ、「家庭科はあらゆる学問のダイジェスト版ともいえる。共通一次が終われば忘れてしまふ、というような学問ではないのである」と述べている。（「ひととき」6/25）また家庭科の講師をしていたことのある結城静子さんも「牛乳を飲むことの大切さを説いても、昼食に一口のコーラを飲む」生徒をなげきつつ

長岡の集会

シロウト7人で
開いてみました

小野塚サチ子

8月28日、長岡市（かの有名な新潟三区の中心の町）で「今こそ家庭科を男女共学に!!! 長岡集会」を79名の参加で行いました。

実行委員は7名（高校の教師で、数学・理科・国語・英語・家庭科3名）で、6月の中旬より、「家庭科の問題で、今、私達のやれることは？」と考え始めました。

地道な授業実践の積みあげは家庭科の人達ががんばってくれらるだろう。共学のための資料もNo5まで組合の資料作成委が完成させてくれた。今まで新潟でなかったのは、市民を含めた情宣の機会ではなかったか、できたら、教員以外の人にもたくさん来てもらって集会をしたい。と考えました。「マア、私達の力では7人が1人5人づつ集めて30人になる。これくらいが限度だろう」と会場を決め準備を始めました。口コミや「We」の読者に連絡したり、新聞が取り上げてくれたりしたら連日何本かの電話や手紙が舞い込み、集会の3日前になって急拠会場を変えざるをえなくなりました。

当日は会場がうるまか皆で心配したのですが我々の予想を大巾に裏切る人数が集まりウ

も家庭科が人間として生きる知恵を学ぶ重要な教科と主張している（「ひととき」6/30）。「声」欄でも京都の尾瀬さんが生活を営む為にも男女の相互理解の為に、家庭科の共修が必要と述べ（8/2）、八月十四日朝日の「女から女へ」欄の「古き女」では国会議事録を読んだ保母養成学校教師のNさんが、江田五月さんの文教委員会での質問が男女平等の本質を実によくつかまえていることを述べている。婦人議員の方も男女共修をすすめるというところまでは江田さんと同じだが、女性である故に過去の裁縫、料理にしばらくしているという感想を抱いたことを述べ、家庭科共修に反対する家庭科教師とも共通しており、女自らが「古い女」を捨てる必要を書いている。

八月十五日毎日新聞「教育を追うー改革」私の意見」の中で半田たつ子さんは戦後家庭科は社会科と共に主権者を育てる教科であったが、快適さ、便利さ、能率を追う中ですみにおいやられていき、そのことが教育の荒廃に通じてきた。また女子だけの科目になることによって性別役割分業を固定化する役割も果たしてきた。共修運動のきっかけを紹介しつつこれからは「暮らしの中から生まれる思想や考え方を大切にする」ことが必要と述べた。さらに九月一日から日程オフィス論壇にも家庭科共修をめぐるの特集が組まれた。

（九月以降は次号）

レイシ限りでした。家庭科の教員の参加が多かったのだが、男性教員、主婦、市民、いろんな階層の人達が、「共学を実現させるために今、なにをすべきか」について熱い想いを語ってくれました。家庭クラブや技術検定の先進県で「家一共学」の集会が開かれ、家庭科教師の多数の参加をみたことは、時代は変わっているという想いを強くしました。

又、参加者の中には、片道3時間かけ、子供二人連れで泊りがけで来てくれた人、大学生、など、この集会のために、今まで何のつながりのない人達が多数参加してくれました。集会は成功したが、黒字になったお金の使い道と今後どうするか、明日、実行委を開き、集会の様子や今までの苦労をつまみに楽しみながら総括をしたいと思っています。

シロウト7人でなんとか集会が開けました。

家庭科は男女共学必修で、 長野県の取り組み

長谷川美子

必修か選択か、家庭科教育が大きな岐路にたたされている今年、長野県では、憲法と教育基本法に基づく民主教育をめざす高教組のもと、十数年にわたる共学の実績を守り発展させるため、組織をあげて男女共学必修の運動をくりひろげています。

長野高教組教文会議家庭科教育研究会のこの四月からの取り組みは次のとおりです。

一、学習会……◆春の全県学習会、「家庭科をめぐる情勢とこれからの運動のすすめ方」
—高月佳子先生（家教連）—全県の家教科教師の½の出席をえて、まず家庭科教師自身が情勢を認識し、その上になつてこれからの運動のすすめ方を話しあいました。その結果、共学必修をうったえる討議資料を作成配布し、同時に署名活動を展開することになりました。
◆夏の全県学習会、家教連の第十九回の夏期集会と合流し、全国の家庭科教師と実践交流する中で、長野の共学についても広く知ってもらふことができ、全県の家教科教師の½の参加もあり、有意義な大会でした。

二、署名活動……高教組新聞全面に家庭科特集を組んでもらい、同時に共学必修の署名活動を展開しました。ちょうど組合の定期大会支部大会、教文会議定期大会、婦人部総会等が開かれる時期でもありましたので、アピール文を配布したり、協力要請のうったえをしました。この結果、一ヶ月半足らずの短期間ではありましたが七千を超える署名をえて、八月七日、日高教を通じて文部省へ要請行動をしました。交渉では長野の共学校の実践から共学必修を強くうったえました。一時間半ほどの時間でしたが、文部省もまじめに聞いていた（日高教）とのことです。

三、情宣活動……母親大会、婦人問題研究会等へ、家庭科の共学必修のうったえや、アピール文配布、日教組や日高教の他県、検討委員会メンバー、国会議員、新聞社へ共学の資料を送付し、必修のうったえをしました。こうした組りくみから、地元紙に三日間連続の特集記事としてとりあげられたり、他県から講師派遣依頼があったり、反応がでつあります。

四、県教委との話しあい……本県の指導主事が検討委員会のメンバーとなったため、長野県の共学の実態を正しく伝え、共学必修でがんばるよう、強くうったえました。主事は現場の声をよくきいて伝えたい……という答えでした。

五、その他……長野県では今、家庭科教師の新旧交代の時期にあたり、ここ二、三年、二十人に近い新採があり、この新任者への働きかけをつよめるため、共学資料を配布したり、新任者のつどいに研究会から役員が参加しています。また、自主編成資料としての資料集は内容を毎年改訂しています。また、運動を全員のものとするため、今年は家庭科情報を発行しはじめました。

今後……職場教研、支部教研、県教研、全国教研と、自主編成をすすめて、教科内容を民主的に充実・発展させ、実践を通して家庭の男女共学必修をうたえる。

長い運動になります。ともにがんばりましょう。

愛知での動き

宮崎世津子

「高校家庭科見直し」と森文部大臣が発言して以来、私たちの小さな会（新しい家庭科Weの会・愛知）でもこの問題に精力的にとりくんできました。まず県下の高校の家庭科教員に今年中に今後の家庭科のすむ方向が決定されることを知らせながら、見直しとして予想されるのは差別撤廃条約批准のためなので男女共学必修か選択かのどちらかであり、是非男女共学必修が実現するように運動をすすめようと呼びかけました。教員数五百人、校数にして約百二十校と多いので封筒につめるだけでも結構時間がかかりました。一歳十ヵ月になる男の子といっしょに保育室へはいって積み木で遊びながら作業をすすめました。学習会中心の会が、はじめて外にむかって運動をするということで、ちょっと興奮気味の一夜でした。

次に、「男女共修生活科をすすめる会」が家庭科問題検討会議に男女共学必修の実現と、教科内容は男女がともに自立した人間として生活するのにふさわしいものであることの2

点を要望するということで、他の婦人団体とともに名前をつらねました。（なお、男女生活科をすすめる会はこのことを県下の家庭科教員に知らせるために、私たちと同じようにピラを作って各校に送っています）

さて、蒸し暑さ格別の今年の夏はどんなことをしたかといいますと、長野の男女共学必修の話を長野の先生からお聞きしたいということ、小林いし子先生に話していただきました。10人ほどの顔をにこにこみまわしながら小林先生が「私たちも15年ほど前は、今集まってみえるよりもっと少ない人数でしたよ。」とおっしゃったのが印象に残っています。その集まりが今では24校共学必修、34校選択の共学が行なわれるまでに発展している長野の運動におおいに勇気づけられるととも

に、おおくのことを学ばなければいけないとも思いました。八月にはいつてからは次の2つのことにとり組み始めました。①として検討会議のメンバーに具体的な教科内容を示して男女共学必修の必要性を訴えようということ、分担して教科内容をもちより検討しました。自らの授業にも直結することで、「それでは知識偏重すぎない?」「しかし、これだけはやはりいれておかないと。」と真剣でした。出来上がったものは、従来のものとたいして変りばえしないのですが、教科の全体像を自分たちでつくりだしていく一つのきっかけに

鳥取からの報告

本橋靖子

「鳥取県高等学校家庭科教育研究会」では、「女子必修」を決めている。理由は選択になると女子は家庭科を選ばず学ぶ機会がない、せめて女子だけでも必修にということである。そして日教組組合員として男女共修をすすめる署名は困る、やめてほしいという申入れも行われている。六月二十日の総会では女子必

9

京都における 高校教育制度改悪と 男女共修家庭一般について

森 幸枝

この度、60年4月を目途として高校三原則
つぶしを押しすすめて来た京都府教育委員会
の、有無を言わせない強引なやり方によって、
いよいよ新しい公立高校の教育制度が来年度
から発足することとなった。

その中味は、新たに「通学圏」(5-6校)
を設けて学校間格差がつくられ、普通科の中
の「類型」によって学校内格差も生まれ、さ
らに同じ類型でも入学当初から「系」(文理)
に別けて選別されてしまう、といった全国で
も珍らしい超スライド制と呼ばれるようなも
のである。そして、総合制をなくして単独の
職業高校をつくる等々、長い間かかって築き
上げて来た京都の高校教育を、全く根底から
くつがえすものとなっている。私達各府立高
校では、教育課程の編成権が学校にあること
をよりどころとして最後まで頑張り、府教委
が当初要求していた入学時からの類型別・系
別の教育課程編成よりは、はるかに後退させ
たものを最終的に認めさせた。とはいえ、京
都府が戦後一貫して守り続けて来た、憲法・
教育基本法に基づく差別を許さない教育の理

念がふみにじられ、その具体的な施策として
の高校三原則の制度が崩されたことは、かえ
すがえすも残念である。

48年度改訂以来の、京都府立高校における
男女共修家庭一般(2単位)の制度保障は、
上記三原則の充実・発展の中でのひとつの成
果であって、制度としての男女共修を、教育
の内容として実質的に保障していくという意
味を持っていた。だからこそ、府教委はこの
制度改悪の中で、「この際、すべて学習指導
要領に従うのだ」ということを口実にして、
「男女共修は好ましくない」旨を校長会・教
頭会・教務主任会等々に強力に指導したので
ある。

私達は、本来家庭科共修の問題は、一教科
の枠をはるかに超えた教育原則や男女差別に
かわる大きな意味を持つものであり、この
度の制度改悪の流れの中で埋没させるような
ことがあってはならないと考えていた。時あ
たかも婦人差別撤廃条約の批准に関連して、
文部省が長い間の重い腰を上げ、「女子必修
の家庭科の見直し」を言い出したのである。
そして、京都家教連の仲間たちの精力的な活
動によって、国際婦人年京都連絡会に結集す
る各界婦人層や地元を中心とする有識者層の
賛同を得て、教育長に対して「家庭科の男女
共修継続に関する要請」を行うことができた。
また、マスコミも高校家庭科の問題を再三取

り上げ、とくに地元紙(京都新聞)の取り上
げ方がきわめて原則的であり好意的であった
ことは、男女共修を守る上で目に見えない力
となったと思われる。

このような中で、結果としては現在に比べ
て全日制普通科において6校(うち1校はひ
とつの類型のみ)が、教育課程に共修を位置
づけることが出来なかった。その大きな要因
となったものが「進学に不利」である。今日
なお、京都府立高校で、男子の進学のため
に手段を選ばない発想が残っていることに驚
くほかはない。しかし、府教委の強い圧力に
もかわらず、殆どの既設校(59年度新設の
4校は、研究指定校として女子必修をしてい
る)で男女共修が継続できたのは、前記の有
利な社会的条件にもまして、各学校における
十年余の実績、それに伴う生徒・親・職場の
理解、教科内容の今日的な必要性、教職員組
合のバックアップなどがあったことは言うま
でもない。そして、より基本的には、各学
校での教育課程編成に対する方針の如何と深く
かわっていたと言えるのである。

ともあれ、私達は、この度の試練を教訓と
して男女共修運動の原点に立ち帰り、家庭科
教育の今日的意義を再確認して、全国の仲間
と共に常に学び合いながら前進したいものだ
と思っている。

大阪の状況

高校家庭科の 男女共修に関する状況

阿部 八重

(1)一九八一年七月調査(二六二校中一八四校
回答、国・府・私立を含む)

——府立高校研究会誌より——
理念として(家庭科教師対象)

男女共修にすべき……………六五・五%

男女共修がよい……………二一・二%

内容による……………五%

女子のみ履習……………八・三%

(2)一九八三年調査(府高教調、回収率六三%
府立高校教師対象)

男女共修は必要……………七〇・八%

どちらともいえない……………二六・五%

必要なし……………〇%

不明……………二・七%

(3)現在一部共学を含めて共学を実施している
学校名

(府・全) 西成、池島、泉鳥取、岬、貝塚、

岸和田、和泉

(府・定) 吹田、市岡、和泉、天王寺、

春日丘

(府・通) 桃谷

(市・全) 住吉商、東商、市立、汎愛

(市・定) 日新

(4)大阪での最近の運動のあらまし

3月10日 家庭科の男女共修をすすめる会、

関西グループで協議。ニュース・署名依頼・
労組や団体への働きかけをきめた。

3月17日 大教組・婦人団体などへ協力要請。
3月末から4月にかけて、婦人の集会などで
署名集めをした。

4月から、府高教婦人部ニュースに、家庭科
の内容紹介を毎号のせる。分会婦人部長あ
て署名を依頼した。

5月15日 府高教で家庭科男女共修について
の学習会をもった。

6月5日 府高教婦人部として、共修の件で
対府交渉をした。

6月21日 すずめる会メンバーが、麻生誠氏
(文部省検討委員)を訪問。

7月22日 大阪母親大会で、アピール文配布、
分科会に分散して現状報告と署名協力を訴
えた。

7月、8月 府高教婦人部として、数回会合

をもち、他教科の教師むけに、家庭科の教

科内容をわかってもらうための、授業実践
パンフづくりに取りくむ。9月完成予定。

8月5-6日 府高教婦人部夏季教研で家庭
科の授業実践をレポートし、アピールした。

8月18日 NHK YOUの企画係 中田氏
と大阪サークルメンバーが話し合いをした。

(10月20日 家庭科男女共修問題放映予定)

8月18日 読売ライフ記者、近氏の取材に応
じ、大阪サークルメンバーが話し合いました。

8月28日 府教委主催の教育課程研究会で、
共修を推進するよう意見を述べた。

とにかく署名を！

藤本 了江

関西グループは三月から各自でできるだけの
方法で署名を集めようと取り組みました。大
阪市高教と西淀川病院労組の分は私の手許に
一〇〇枚以上集まりましたが、府高教は阿部
八重さん、その他各自急いで東京へ集中しよ
うと云うことになりましたので集計はできま
せんでした。

然しまだ日があるということが分ったので、
七月二十二日の大阪母親大会の国際婦人年シ

ンボジウムでも訴え、署名用紙五枚入りの封筒を一〇〇通、協力して下さる方々にお願ひしました。

又二十一世紀女たちの会主催の「男女平等って何だろう」の会でも家庭科の男女共修運動の報告と訴えをし、署名用紙四十枚ほどをお願いすることができました。

マスコミ関係

藤本 了江

NHKの教育番組YOUTUのディレクターから京都の森幸枝さんに申し入れがあったので、東京のNHKの放送のような興味本位、皮相的なものにならないよう八月十八日当事者に会い申し入れをしました。

子ども達の手や頭の発達が大変遅れている状況、家庭の崩壊の深刻さ、個人として自立できず、社会人として消費者の立場に立てない会社人間の異常さなど。その立て直しには家庭科の小さい時からの一貫した男女共修をと。放送予定は十月二十日夜十時半から十一時半。進め方として「いかに家庭科は楽しいか」という風にしたいと云ってました。

又同日午後月刊「読売ライフ」(読売新聞宣伝紙)の取材に応じました。十月末か十一

いろいろな集会から

母親大会から

—共修への関心今一つ—

大西 歩

第30回日本母親大会が、7月28日・29日に分科会は明治大学お茶の水校舎、全体会は蔵前国技館を会場に行われました。28日は、雨降りで蒸し暑く、風もない日で、分科会の明治大学の各教室は備えてある椅子だけではとても足りなくて、教室の床にすわっている人も多く、教室の中から熱気がふきだしてくるといったようすで討議が進められました。家庭科に関連の話題が出るのではないかと、思い「生きる力を育てる——ほんとうの学力」と「性教育——人間の尊厳と男女平等」の分科会に参加しました。性教育の分科会では、マスコミなどの性情報が氾濫する中で母親としてどのように対処するか、しているかが多くの意見を占めました。一方、学校教育の中に、男と女の関係がどうなっているか、人間の尊厳を教えることの重要性を強調する発言

月始めに関西地区の読者に配布の予定。こちらには賛成・反対意見を対比させたい。というのが、国際婦人年の崇高な目的に添えるかどうかマスコミの姿勢に危惧を感じます。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

大阪府公立中学校(大阪府を除く)の

「技術・家庭」共学の実態(S58)

—大阪府教育委員会の調査による—

三年間の完全共学……………二七校 九・一%
学年通しの別学がない……………三六校 一二・一%
学年通しの共学がない……………六五校 二一・八%
三年間の完全別学……………五二校 一七・四%
その他……………一一八校 三九・六%

八月二十七日

佐世保にて

—悩みながら「現状維持」の署名をする先生—

樋口 恵子

長崎県主催の婦人問題会議に招かれて八月末長崎市に出かけました。その帰途、佐世保の女性グループからおさそいがあり、こちらは十人程度の女性が勝手に「話を聞く会」をつくって呼びかけたもの。だれでも来られる気楽な集会で集まったメンバーは三百人余り。

夜だったせいか男女含めて学校の先生の姿も多かったようです。

質問の口火を切ったのはそんな女教師(家庭科)の一人。共修運動の見通しへのご質問だったのですが、ご本人自身ためらわれながらも、切々と語られたのが印象的でした。

「この地方でも、校長先生が中心になって、家庭科教師への説明会が開かれたりしています。県(市?)の態度としては、男女平等はもっともなことだが、今は高校も中学も課目を減らす傾向で必修が増えたりすることは絶対がない。男女平等を言い過ぎると女子まで選択に落とされたりして、家庭科の現状が後退するから、家庭科の現勢力をぎりぎり維持するために、現状のままを願う以外には、道はない——そう言われるとそれも、とってもよくわかるんです、現場の身になると。それで結局私も、男女平等を願う一人としては大きな矛盾を感じながらも、現状維持の署名をして出してしまいました。出したあとも、あれより仕方がなかった、でも、あれでよかったんだろうかって、いつも疑問が頭から離れないんです。」
家庭科の先生の中には、こんな悩みを抱えながら、半ば心ならずも署名し、それがやがて文部省の机の上に積み上げられていくわけです。

二つの集会から

持田 ナミ

「家教連」

第十九回夏季研究集会

軽井沢塩湯温泉に約三五〇名が集って「家庭の危機と家庭科教育」をメインテーマに、7月30・31・8月1日の三日間、十八本のレポートをもとに、小・中・高に分れ討論が行なわれた。男女共修にかかわる内容をひろってみると、記念講演「いのちとくらしをどう守るか」基礎講座「③、条約・批准と雇用平等法、家庭科の男女共学・男女共学の教材」参加者との交流を交えたミニ講座では、共修向き教材の研究や共働きの家庭づくりなど。今次集会の課題五項目の中には、(4)男女共学の今日的意義をあきらかにし、今後の課題をつかむ(男女平等教育をふくむ)など。

「性教協」

第三回夏期研修会

「性教育のめざす女性観・男性観・人間観とはなにか」をテーマにして、8月1・2・3日まで、川崎の中原市民館で、約三〇〇名が参加して研修会が開かれた。

特に家庭科教育、男女平等教育に関連していると思うことを挙げてみると、

男女の共生と連帯をもとめる生き方の出来る子どもたちに育てていきたい(基調提案の結び)と男と女の関係はこれでよいかをテーマに、高校生男女に、男女差別、男女の性的関係についてアンケートをとったり、差別撤廃条約、男女差別、離婚、売春とポルノ、などの項目について、関係機関に行っているビュート活動をし研究発表と討議を行った学級活動の報告(分科会—男女平等と性差の学習)であった。全体的には性を家庭生活、家族と結びつける視点がうすかった。

'84「We夏季フォーラム」

で考えたこと

(8月6、8日)

武田恭子・憲幸

女も男も、人がよりよく生き、暮らしうる社会とは？ それを目指す教育とはどうあるべきか？ 差別・管理などの問題をかかえた現行の教育を変えるには？ 教員をしている私たちは自分の労働の味を問い直すという意味でこうした問題にこだわり、又、日常の中で見失いがちな視点から自分の生き方も含めて問い直したい、そんな思いをもって今年も「Weフォーラム」に参加しました。家庭科男女共修運動を通じ「We」と出会ったことは、そのまま人間らしく生きるための新たな視点を獲得することでした。「Weフォーラム」での様々な課題をかかえたみんなとの出会い、分科会・全体会での討論・批判。参加した分科会「性別役割分業(観)のない社会とは」の中で論議された、暮らしの場・働く場・教育の場での性差別とそれをなくす取り組み。例えば、学校での生徒名簿がなぜ男女別でなければならぬの？と問題を投げかけても、「些細なこと」と切り捨てられぬためにはどうすれば？といった問題。或いは人間らしく生きるのを妨げる労働状況の悪さ。生活の中で見えにくれる性別役割分業。等々。それ

ら一つ一つに対し、暮らしの場で変えるべき点、労働をめぐる状況を何から変えてゆくか、働く中味をどう変えてゆくかが具体的にわたがします。フォーラムの良さの一つである、常に発展してゆく自由な議論・交流を通じて得たものの一つでした。さて私たちは自身の労働の中味である教育にこだわります。「自分のまわりの人間はすべて文化をもっている。そしてそれを作ってきた存在である」とは全体会の講演の講師、小沢有作さんの話で明治以来の「つくられた学校文化」への批判ですが、現行の教育を問い直す上で示唆的な課題として残りましたが、自分が人間らしく生きるために、例えば蟬の歯ざりでもよいからこうした課題に取りくむこと、そんな気持ちで強くなった三日間のフォーラムでした。(二人で参加し、その後話し合ったものをまとめました)

学生の会から

松原 慶

「家庭科の男女共修をすすめる学生の会」があったらいいなあ——、と書いていても自然にどこからかわいてくるわけじゃないし、それじゃあ自分たちで作っちゃおう、作った

のはいいけど何しよう……と頭を痛めている会のそもそのきっかけは、宮崎先生の家庭管理概論の授業で毎週ざぶりと味わった衝撃波だったように思います。居眠りしている学生の後姿越し、恋うらないや合コンの相談に熱弁をふるっている学生たちのしゃべり声を聞きわけかけ、なんとか宮崎先生の声に周波数をあわせて聞き取った講義は、目からうろこが落ちるというのか、薄目が開くというのか。発見や感動をその度ごとに身近の大切なひとたちに話してゆくうちに、少しずつ種がばらまかれてゆきました。

環境や教育の問題にしろ、リブにしろ、平和にしろ、運動に関わると避けて通れないのは「なんとか反対！」だけではダメ、自分から出発して、自分の暮らしを変え、身近かな人たちの関係へ——という道筋を抜きに何も変わらないこと。その原点がすっぱり「家庭科」の可能性の中にあって、素朴に驚きました。その「家庭科」が危ないのを横目でやりすぐすことはできないし、学生である以前に「生活者」である私たちに、とっておきの行動するテーマだとかぎつけて、冒頭の「あったらいいなあ——」になったわけです。大体月一回、毎回十数名の参加者で、今は「家庭科、なぜ女だけ」の読み合わせなどをボチボチやっています。(連絡先 東京都世田谷区赤堤五—一〇—一六 松原 慶)

驚いた 高校PTAの 決議文

馬場 洋子

八月末、鹿児島で開かれた第三十四回全国高等学校PTA連合会大会の決議文を読んで驚いた！

「(前略)三、家庭の機能崩壊が論じられ、望ましい母性を育てる子女の教育が叫ばれている時、『婦人差別撤廃条約』の批准に関連して女子必修、男子選択という現行の『家庭科』履修形態が変更されようとしており、二十世紀に生きる子女の人間形成上ゆるがせにできない問題である。高等学校の科目『家庭一般』の現行履修形態は絶対に存続されるべきである。」

なんと「全国三〇〇万会員の代表六〇〇〇名」が「誠心誠意研究討議を行った」結果がこの決議文。

聞くところによると、会場から、異議あり／＼の声が出たけれど、無視。見れば前面に座っている役員は女ゼロだったとのこと。まさか批准反対って言うんじゃないでしょうね。「誠心誠意」が恐ろしい！

国際婦人年日本大会の 決議を実現するための 連絡会報告

和田 典子

一、「男女雇用機会均等法案」をめぐって
連絡会では政府案に大きく失望し、実効性ある雇用平等法を野党が共同で提案するよう七月二日、大政党に対し申し入れを行い、つづいて、七月十四日には、社、公、民、共、社民の五政党を招き、野党対案をきく会をもちました。民社の反対で共産が共同提案に加われなかったため、四党共同の「対案」が代表の多賀谷氏(社)から説明があり、質問のあと、共産の提案が山中氏より報告されました。また、衆参社労委員会での審議日にあたる

鹿児島の高教組婦人部の役員をしてい
る山下百合子さんからのニュース——大
会後にPTAの会長と会ったところ「男
女共修まかりならん、世の中メチャク
チャになる」といわれたとのこと(和田)

七月毎週には、連絡会の関係団体からたくさんの方々が詰めかけ満員の状況でした。

一、国連婦人の十年世界会議
一九八五年七月一五日～二六日(政府間会議)七月九日(または一〇日)～一七日(NGOフォーラム)開催されます。

ケニアのナイロビにて。(フォーラムは、ケニア・センターが会場)

一、中学・高校家庭科の見直しに関する申し入れ

六月一五日、森文相に連絡会代表五氏(主婦連、地婦連、有権者同盟、日本婦人会議、事務局)が面会し、見直しに当たっては、

1. 検討会議に連絡会の代表を加えること
2. 「条約」10条のb、c項をふまえる
3. 中・高における家庭科および技術・職業教育を男女共修(共学・必修)とすることを申し入れました。

一、家庭科問題をめぐるシンポジウム

◆九月二一日、午前10時より全体会をひらき今後の活動方針を協議したあと、午後より、

1. 家庭科問題に関する48団体の経過報告。
2. 各界の意見をきく。
3. 小委員会の結成。

◆会場 参議院議員会館

(詳細は次号で報告します)

世話人会報告

△七月十二日▽

1. 今年が大きなやま場なので、全力で、各方面に働きかける。
- ◆いろいろな夏の集会へ出かけて、アピールをする。

◆検討会議委員へ強く共修の働きかけをする。

2. 新しい一問一答集を作ろう。

3. 「家庭一般」の第二次内容検討をする。

中学校の「技術・家庭」についても同様。

4. 次の集会について

●日時と場所

●この集会は、検討会議が十二月に結論を出せ予定なので、それに向けて、各団体のアピール、共修家庭科を学んだ生徒たちの声、私たちの意見を多く出してもらう。

そして、家庭科の男女共修を、是非、実現するようにみんなで力を結集しようということになった。

5. 会報秋号は増ページ。(八島紀子)

△八月十三日▽

時間をかけて共修家庭科の内容を検討しよう、朝の十時から弁当持参で集まりましたが、午前中は主として検討会議や各団体の動

き、各地の状況について情報を交換し、検討会議に向けてどういう主張をして行ったらいいか話し合いました。

★決定したことは――

- 一〇・二七集会のタイトル。
- 会報冬号の早期発行。
- 婦人問題企画推進本部にも要望書を出す。
- 高令化社会を考える女性の会でアピールする。

★次に、条約批准について疑問の声が出てくること、そのひとつのきっかけになった中央公論の長谷川三千子さんの論文について話し合い、批准のたいせつさを確認しました。

(内容検討の結果については次のページをのらん下さい)

△九月一日▽

★報告事項

- 職業教育課長が9月1日付で菊川治氏に。
- 江田五月氏が7月25日の文教委員会家庭科の問題を質問。その時の感想として、必修の方向が見えている、中学の見直しもはっきり言ったことで意味がある、との事。各地方の人たちが文部省に働きかけた時、共修をすすめる側の意見を一生懸命聞いていたという報告が会にはいつてきている。
- 検討委員に送った資料を文部省内でも勉強

家庭科の内容

検討結果

芦谷 薫

男女共修家庭科の内容一次試案を会報に提示したのが83年秋。84年4月総会では試案についての話し合いがもたれた。そこで出された意見をもとに二次試案の検討をこの夏世話人会で行った。

一次試案をつくる時も今回も大変むつかし

どっちが先？ 共修の制度と内容

ひとつの科目の内容には唯一絶対のものはあり得ません。特に現実の生活に深いかわりを持つ家庭科は、時により、地域により、また生徒の状況によって内容が考えられなければならない。

けれども、共修運動をすすめるにあたっては、「どんなことをやるのか見当がつかない」ということでは困るので、ある程度のイメージがわくような試案をつくることにしました。さまざまな立場の人が参加している制度の実現を目的とした市民運動の団体としては「出過ぎたこと」とも言える

かもしれない。

唯一絶対の内容はあり得ないし、女子だけが学習した方がいいような内容もないのですから、「内容ができ上らないうちは共修を決めることはできない」というものはありません。内容の検討は共修が実施される前も実施されてからも続けられるべきです。そして、実施がきまれば、内容検討は間違ひなく進むのですから、その意味でも実施の決定は早い方がいいのです。

梶谷 典子

したので15部ずつ送ってくれとの連絡。
●48団体で、9月21日、家庭科問題をめぐるシンポジウムを開催、二百人規模の予定。

★検討事項

- 9月3日検討会議で和田さんが発言する提言の内容を検討。
- 臨教審に関して、会長あての要望書作成、委員の交渉担当を決定。
- 婦人問題企画推進本部長、婦人問題担当室長あての要望書作成。
- 10・27集会に関し、役割、宣伝方法を決定。(馬場洋子)

【新世話人】

東京の菊地ふみ子さんが、次のような意見を添えて、入会を申し込むと同時に世話人を引き受けて下さいました。

私は今、国際的レベルでの『教育差別(差別教育?)』について学ぼうとしているので、日本の家庭科問題の動きについては大変興味を持っています。(興味、というよりは、なかなか共修が実現しないことへの怒りに近い憤りといった方が正しいかも知れませんが)。

摘と、表現の工夫をもっとという指摘であった。今ひとつは、生徒にわからせるためには、内容の配列の見直しや、関連させて学習させる項目の指摘である。後者については、当会として検討発表できるのは、男女共修の内容は最低この位という目安であって、順次性や教授方法を示すことはできないということ、主として前者の意見を参考に検討した。

(1) 特に高校の内容は言葉がたたく、具体的なイメージがつかめないという点について
一次試案を作る際、京都、長野、北海道、民間教育団体家教連などの共修内容案を見比べながら「家庭科の教師以外の人達にもわかりやすく」と「家族とは、家庭とは」「よりよい生活のために」「次の世代のために」の三本柱をたて、中・小頃を洗い出す作業をした。「キャッシュレス経済の問題が今高校生の間でも頻繁に起っているから是非入れよう」「年金問題も」「母性父性の見直しは?」「実習はどう入れる?」等々各世話人からいろいろ出た。それらは大きな問題から小さなものまで多様であり、又地域によってとりあげる題材もいろいろあってこそよいのではということもあって、結局具体的な小項目は入れず、柱になる大項目と中項目をあげるだけにどめ、項目もある程度きちんとした(?!)用語を使うことにしたという経緯があった。

そこで、二次試案は一次試案をどうわかりやすく表現するかに頭を悩ませたが、山形の佐藤さんからアメリカの共修家庭科の教科書を例にコピー風に項目を直したらというアドバイスを得て、アメリカの教科書を参考に一次試案を練り直してみた。が、大項目の立てかたが異なるのでうまくいかずボツ。さらに内容編成の視点を一次試案の前に入れ、後に実践で使用されている生徒用プリントを加えるのはどうかという案も考えたが、今ひとつピンとこないということでこれもボツ。ハアノムツカシカア。

(2) 最後に、一次試案のわかりにくい項目の補正と、留意点をつけ加えるということで二次試案が難産の末できた。

△一次試案の補正▽

1. (4)家事労働↓家事労働の意義と問題点
3. (2)家庭経済の現状と問題点↓生計費の理

論

(3)家計↓家庭経済の現状と問題点

(4)生活保障↓生活保障(生活保障、年金

等)

△内容編成にあたっての留意点▽

①共修家庭科の内容としてのミニマムを示したもので順次性を示すものではない。

②実技、実習について、技能的なことは中学

校までに学ぶこととし、高校では、「移り変り」「現状と問題点」に関連して実験・実習・調査等を取り入れる。

③生活に必要な条件や原理的なことは中学までで学ぶこととし、高校では生活を歴史的視点から学習したり、現状と問題点を社会的視野から学習することを中心とするような内容とした。

中学校での

共修こそ重要

持田 ナミ

中学校の技術・家庭科も見直す、という高石初中局長の文教委員会での発言を聞き、中学家庭科の教師として、共修の重要性を訴えたいと思います。

小学校では共学であった家庭科は、中学校になると、男は技術・女は家庭科の制度(相入れ)は、性別役割分担意識を公教育の立場で位置づける結果になっています。

家庭科は、性別以前の人間生活の問題として、衣・食・住・家族の営みについて、男女共に国民の基礎教養として、小・中・高を通して学習すべきだと考えます。特に中学生は

発達段階からいっても、異性を意識する年頃なので、家庭科のように生活を対象とする教科で共学にすることは、学習の中で、異性の考えや意識を生(な)の声の中から理解し、共に作業することにより新しい側面を発見します。私が共学で実践した保育領域の授業の一部を紹介してみたいと思います。

—学習のねらい—

①お互いの性を理解し、男女の望ましい関係がわかり、協力して人間らしく生きようとする力を身につけさせる。

②生命を守り育てる意義と生命の尊さを自覚させる。

③民主的な家庭生活のあり方を理解し、家族の一員としてのかかわり方ができる。

学習の進め方は、身近かな問題をとりあげ話し合いを重視しましたが、学習の盛り上がりは別学とは比較にならないものがありました。

例えば、男女の性意識のちがいはじめて理解した驚き、男女交際についての反省などをはじめ、多くの例が挙げられます。

中学生の心と体と生活のくずれ、親の生活の荒廃と教育力の衰えが社会問題になっているいま、現実的に考えても、中学校家庭科の男女必修はぜひ必要であり、日本の教育的課題だと思っています。

「差別撤廃条約への

異議」批判

駒野 陽子

家庭科の男女共修をすすめるために、強いテコとなる差別撤廃条約に対し、異議を申し立てた発言が、女性から出され、かなり話題になっているのをご存知ですか。

今年の中央公論五月号に、長谷川三千子という女性が載せた「男女雇用平等法は文化の生態系を破壊する」という論文がそれです。

長谷川さんは、東洋哲学専攻の埼玉大助教授。でもなぜか中央公論では「主婦・教員」という肩書きで紹介されています。

彼女の意見を要約すると

「差別撤廃条約が、女性差別や性別役割にもとづく慣習、慣行、文化的・社会的行動様式の修正を要求しているのはまちがいだ。それぞれの国の固有の文化や慣習について規制するのは内政干渉であり、文化的な侵略、植民地主義ではないか。雇用平等法は、日本の主婦に伝統的な男女のあり方を変えることを強制し、主婦の意気を阻害させる。こうした干渉は、自然の生態系を乱し、日本の文化を破壊する」というものです。そして、男女雇

用平等法は、家庭を守り、母親として育児や子どもの教育に専念している主婦をおびやかすものとして、その制定に反対しています。

この意見は、女性を家庭にしばりつけながら、半人前労働者(パートなど)に駆り出したい経営者団体や、家庭基盤充実政策を推進したがっている政治家たちに、たちまち利用され、ある経営者団体の機関誌に転載された。国会の答弁で大臣が引用するなど、破綻を拡げています。「家庭科の女子のみ必修」を固守しようとする高校長会や指導主事の人たちなども喜んで使いそうな発言です。

文部省がやっと、条約批准の妨げにならないように家庭科の見直しを言い出し、検討会議を発足させたのに、こんな発言がもてはやされては、私たちの運動にとっても由々しいことになります。でも「男女共修をすすめる会」のみなさんなら、この考えのあやまりにすぐお気づきになるでしょうね。

差別撤廃条約は、女性差別を人権問題として許せないもの、という立場に立ち、それをなくしていくポイントとして女性の労働権の確立と性別役割分業の排除が必要だ、という結論に到達したのです。条約ができるまで約半世紀に渡って、世界中の女性が討議し、強く実現を望んでいることが盛りこまれている

のであって、条約が一方的に個々の国々にその実施を強制しているものではありません。そうした背景も知らず、条文の一部を取り出して揚げ足とりをしているのです。

性別役割分業をなくすことが、生態系を破壊する、というけれど、現代の性別役割分業は、自然に生じた生態系ではなく、産業社会の効率のために作り出されたもので、そのひずみが、今、家庭・人間にされてしまった女性ばかりでなく、働き人間に仕立てられた男性をも苦しめています。エコロジーをもち出して論ずるなど見当がいはなはだしい、意見です。

固有の文化が女性差別や人種差別など、人権を犯すものなら、それを変えて、より良い文化を創造していくべきです。残すべき伝統と、改めるべき伝統の区別もつかないとはまったくお粗末な意見ですね。

そして何よりも、自分は学者として大学の先生として社会的活動をしているのに、主婦は家庭を守るべきだなどと言うのは、主婦の味方をしているような顔をして、自分は例外だと主婦を見くろんだエリート意識からの発言だ、と思いませんか。でも女性の意見として出てきただけにますます悪用されそう。大いに反論しましょう。

「家庭一般」は 選択必修になると いうけれど……？

半田たつ子

家庭科男女共修運動の初期、一女性評論家が「男の家庭科なんて、風景としてイヤ」と言いました。この異和感・抵抗感は十年余を経た今、見事に薄れました。ただ今の家庭科教師たちは「女子必修を強化していった文部省が、共学必修にするはずがない」と思い込み（まされ）、権力のしめつけの中で「共修は理念として当然だが、時期尚早」という言葉に逃げ込んだのです。

第13期中教審の必修削減、選択拡大の答申は、「共修運動は男女選択を招き、家庭科の衰退に連なる」との不安を一層かき立てました。この故に「現状維持」に唱和した家庭科教師が多い、と私は見えています。彼女らの言いは「家庭一般女子必修・男子選択の現状こそわが国に適応した形態」というのですが、普通科男子の体育は女子の4単位増。男生徒が家庭一般を選択する余地のないこと、先刻ご承知のほすです。

土壇場の今、新事の提案が出てきました。日本教育大学協会第二部会技術・職業指導部門では、7月27日「小・中・高校に一貫した技術教育を確立するための提言」をまとめ文部省に出しました。これによると、小学校四年から週2時間「技術」に関する教科をおく。中学校では、技術・家庭科を技術科と家庭科、または技術分野と家庭分野に分離し、いずれも男女共学、週2時間。高校では家庭一般を、生活設計と生活技術に分け各2単位。「職業技術」に関する複数の科目と「家庭」に関する2科目をくり、それぞれ1科目以上、合わせて3科目6単位を男女に選択履修させる、というものです。

日教組婦人部長会では6月「一個の自立した人間として生きてゆける力をつける教育を受ける権利は、男女共にもつています。男女生徒共々に職業訓練の機会を与え、生活者として自立する能力と共に、家庭責任を負う事の出来る力をつける機会を与えなければなりません」と提案。さらに7月15日の日教組家庭科内容等検討委員会では、家庭科を「生活学」と呼ぶことが望ましい、としています。

朝日「論壇」（6・20付）で原正敏氏は、技術・職業教育をこそ男女共学にと提唱。家庭一般を選択必修にするなら、工・農・商の

科目と組み合わせよ。家庭科は職業に関する教科で、家庭一般はその一科目なのだから、と言います。

文部省は「男女同一の教育課程」（10条b項）にするために、①男女共に必修②男女共に選択③他教科と組み合わせた選択必修の三つがあると言ひ、各新聞が実現可能性の高いのは③と書きます。もし③を採り、体育と組むなら、現行と全く変わらず、男女の役割についての定型化された概念の撤廃（10条c項）は、到底望めません。

第二部会技術・職業部門の提言や原氏の意見のように、技術・職業と組み合わせれば、体育や（入試に無関係な教科ということ）芸術と組み合わせる便宜的方法より筋は通るかに見えます。しかし、生活的自立を促し、人間らしいくらしを学ぶものだからこそ、男女共修にと訴えてきた私たち。職業教科だという原氏、技術・家庭科の相互乗入れにも似た二部会の提言に疑問を抱きます。選択ではダメなのです。

それにしても「共修といえば選択になる」とおびえた家庭科関係者に対し、小中高一貫の技術・職業教育を打ち出し、技術・家庭の現行七時間を十二時間まで拡大する二部会の「提言」の積極性。学ばべきだと思いました。